

講演5. インプラント治療の安心・安全と臨床教育

－最新の治療法から問題症例まで－

○近藤 尚知

岩手医科大学歯学部歯科補綴学講座
口腔インプラント学分野

近年の歯科治療の動向はめまぐるしく変化し、患者側の求めるものも多様化し、日常診療の在り方にも影響を及ぼしている。かつては、「歯の痛みをとりのぞいてほしい.」, 「よく噛める入れ歯がほしい.」という単純な要望に応えればよい時代であったが、「より美しい歯並びにしてほしい.」, 「より白い歯にしたい.」, 「取り外し式の入れ歯はいやだ.」という希望もかなえるための知識と技術を求められる時代となった。上記のような希望にこたえ、そして患者のQOLの向上に貢献することのできる歯科医師を養成するためには、臨床教育の在り方も再考することが必要となりつつある。

インプラント治療も例外ではなく、特にこの10年間はそのトレンドが大きく変化してきた。骨移植、審美補綴など、インパクトの大きい治療が注目を浴びた時期があり、患者も歯科医師も安易にその流れに乗ってしまい、医療過誤といった最悪の事態に至ることもあった。その結果、昨今は、低侵襲・安全・確実といったより現実的な内容が、再度重要視されるようになってきた。本講演においては、演者らが行ってきた最近10年間のインプラント治療を紹介しながら、最新の診療機器を含めた今後の展望、さらにはトラブルの原因についても述べる。

受賞講演 I

上顎前歯部に双生歯を伴う不正咬合2症例の矯正治療

○佐藤 和朗

岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座
歯科矯正学分野

今回われわれは、上顎前歯部に双生歯を有する男児2名の患者の第一期矯正治療を行った。矯正臨床において過剰歯は歯列不正や萌出異常を引き起こす原因となり、抜去される頻度は非常に高いと考えられる。しかし、本2症例のような過剰歯が正常歯と癒合している場合には安易に抜去することは困難であり、また正常歯同士の癒合歯よりも arch length discrepancy に及ぼす影響は大きいと考えられる。従って、通常の癒合歯を有する患者の矯正治療とはその点で大きく異なる。

第一症例では上顎右側側切歯部に、第二症例では上顎左側中切歯部に双生歯を有していた。第一症例、第二症例ともにエックス線およびCT検査より双生歯は、エナメル質と象牙質で癒合しており、歯髄は交通していることが判明した。分割処置を行った場合には抜髄を免れることはできないと判断し、双生歯の分割は見送り、両症例ともに双生歯の形態的異常をそのままに上顎歯列内に排列する治療を行った。特に第一症例では、エックス線写真だけでは歯髄の交通は確認できず、CT検査において確定診断することができた。癒合歯や双生歯の分割抜去の決定はCTによる診断が不可欠であると考えられた。

第一症例、第二症例ともにマルチブラケット装置を用いた第一期矯正治療を行ったが、最終的な治療結果を判断するには時期的に早いと考えられる。歯齢の変化によって負の arch length discrepancy が大きくなり、再度叢生症状を引き起こすことも考えられ、また上下顎の tooth size ratio の不調和が将来予想されるため、患者の咬合や顎態の成長変化が終了した後に、第二期矯正治療の必要性がある。

このような患者では永久歯の萌出誘導を行うとともに、長期的な咬合管理のもと、最終的に

は歯の形態修正、抜歯、補綴治療等を考慮しながら永久歯列期での個性正常咬合の確立をしなければならぬと考えられる。

受賞講演Ⅱ

歯周病の検査を考える

○成石 浩司

岩手医科大学歯学部口腔機能保存学講座
歯周・歯内治療学分野

この度、平成22年度岩手医科大学歯学会優秀論文賞受賞という栄誉をいただき、素直に嬉しく思いますとともに関係の先生方には心より感謝申し上げます。

受賞の対象となった論文のタイトルは「重度歯周病患者における歯周病原性細菌に対する血清IgG抗体価の変化：症例報告」です。歯周病は口腔常在菌による慢性感染症であるにも関わらず、臨床の現場では歯肉の発赤・腫脹の有無や歯周ポケット深さなどを指標にしたいいわゆる“歯周組織検査”に基づいて診断されます。このような現況について、われわれ歯周病研究者は忸怩たる想いを抱きつつ、“歯周病細菌の感染度”を指標にした歯周病検査が一日も早く臨床応用されるように努力している次第です。本症例報告では、ある広汎型慢性歯周炎患者において、歯周治療による炎症の改善に相応して歯周病細菌に対する血清IgG抗体価が健常レベルにまで下がった症例をまとめました。このような症例報告を積み重ねていくことが、感染症である歯周病の検査として歯周病細菌に対する血清IgG抗体価検査が有用であることを臨床の場に広めていく最善の策であると考えています。

今回の受賞講演では、タイトルにもありますように、本歯周病患者治療例を紹介しながら、歯周病検査の現況から将来展望に至るまでの私見を述べさせていただきたいと思います。また、今回、このような形で私の歯周病治療に対するコンセプトの纏めを行う栄誉を得ることができましたが、あらためて解明されるべき研究課題が山積していることに気付かされた次第です。今後も、本研究分野の発展を通じて、岩手

医科大学歯学会の発展に貢献できるように弛まぬ努力を誓いたいと思います。

最後に、この度の受賞につきまして、私の大学人としての臨床・研究活動を支えて下さっているすべての先生方に対して、あらためて感謝申し上げたいと思います。

一般講演

演題1. 当科における過去6年間のICU管理症例の検討

○大橋 綾子, 鍋島 謙一, 坂本 望,
佐藤 健一, 佐藤 雅仁, 城 茂治

岩手医科大学歯学部口腔外科学講座
歯科麻酔学分野

目的：1989年の開局以来、当科は歯学部の手術における全身麻酔を担ってきた。その間、口腔領域の悪性腫瘍切除後における再建手術は、有茎皮弁から遊離皮弁に変化してきた。その結果、他科との合同での手術が増加し、遊離皮弁における血管吻合の保護及び血流維持のため、術後静脈内鎮静法併用でのICU管理が増加してきた。その理由の一端には、2005年に歯学部附属病院と医学部附属病院が統合され、ICU利用が容易になったことも挙げられる。今回われわれは、過去6年間に術後ICU管理となった21症例を調査し検討した。

方法：過去6年間のICU管理となった21症例について、麻酔台帳・当直日誌を調査した。

結果と考察：術後ICU入室予定患者は21症例中14症例が遊離皮弁の再建術で、3症例が術後気道管理目的、記載の無いものが1症例であった。また、予定外入室は3症例あり、その内訳は術後気道閉塞をおこした症例、術中から循環器系に問題があった症例、術後出血のため再手術、出血点が見つからず、念のため気道管理目的で入室した症例であった。気道管理では気管切開が17症例であった。呼吸様式では15症例で人工呼吸器を使用していた。ICUにおける鎮静では15症例でプロポフォール、全例でフェンタニルを使用していた。